

遙かな森 衍する谷
北澤三保 六つの短篇小説



北澤三保

遙かな森 𪗇する谷

6つの短篇小説

文藝春秋版

著者略歴

一九四五年樺原市に生まる。
北海道立土別高校卒業。コ
ビライターとして七年間
サン・アド勤務後、イギリ
スのリッチモンド大学に一
年間留学。一九七五年「遙
かな森」を発表、文藝界新
人賞佳作。七九年「逆立ち
犬」、八〇年「狩人たちの
祝宴」が芥川賞候補となる。
作品として他に、「ゼブラ
ゾーン」「パントマイム」
「歌麿」「カモメを撃ちに」
などがある。

遙かな森飼する谷

一九八〇年九月二五日 第一刷

著者

きたざわ みほ
北澤三保

発行者

杉村友一

発行者
株式会社

文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話代表(〇三)二六五二二二一

定価

一三〇〇円

印刷所

精興社印刷

製本所

加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

遙かな森 飴する谷 六つの短篇小説 目次

盛夏の森 7

森の声 33

颱風のあと 57

飴する谷 83

逆立ち犬 169

狩人たちの祝宴

装画
犬飼直彦

遙かな森 研する谷

六つの短篇小説

盛夏の森

誰かの呼ぶような声に目を覚すと、孝作は森の中にいた。暗い夜であった。鬱蒼とした巨木の影が頭の上に覆いかぶさっている。そしてその梢のすぐ向うに、無数の大きな星がまたたいていた。

消えかかっている焚火の向うで男が眠っていた。男は、苦しげな、怒りのこもった声で二度、叫ぶように呻くと、体を反転してまた静かになった。誰かを呼び止めようとするような声だった。

火は嵐で倒れた大きな木の傍らに、それを風よけにして焚かれていた。その木の小枝を枕にして、焚火をコの字形に囲むような姿勢で男は眠っている。男は、吉岡という孝作の父と親しい猟師で、孝作がこの男と森に入ってからすでに二晩目である。

何時だか見当さえつかない。あたりの気配から、まだ夜明けにはほど遠いことが知れるばかりだ。起きあがって消えかかっている焚火に枯れ枝を入れると、孝作はもういちど眠ろうと思つて横になった。しかし背中中に不快な湿気を感じて、なかなか眠れなかった。

風の落ちた夜の森は、得体の知れないざわめきに満ちていた。ときおり、それらの間断なく続いている音の上に、木の枝の折れるような鋭い音や、鳴き渡つてゆく夜鷹の聲が高く響

いたが怖しさはなかった。孝作はまた起きあがって、枯れ枝を火の中に投げる動作を続けた。小さく折っては投げ入れる。

やがて、火は生きもののように闇の中で燃えさかった。その火に照らしだされた吉岡の顔に濃い陰影がある。炎が揺れるたびに、その赭黒い反映が怒りや悲しみの表情を作った。

「ああ、吉岡さんが泣いている。……あ、こんどは笑っている」

孝作は枯れ枝を投げ込みながら、長いあいだ背後の底知れぬ闇の中に浮かびあがるその顔を見ている。

遠い梢から聞こえてくるハウという吐息はエゾフクロウの声である。ハウ、ハウと鳴き交している。

「ハウ」

つられて小声でつぶやいて、孝作はその自分の声の響きに怯えた。

ゆうべ、森に入った最初の夜に、孝作は生まれてはじめて身近に狐の声を聞いた。今夜は、その狐も鳴かない。吉岡が、あれが狐だと言ったその声は犬の遠吠えに似ていた。長く尾を引く、あのものがなしい遠吠えの声だった。それは、闇をふるわせて森々に舒した。

膝まである皮の長靴が、火に熱くなって心地よい。あたりは何かの気配に満ちた深い闇で、火の周囲だけが小島のように視界に浮かびあがっていた。孝作は、焚火の傍らに熊笹の茎に刺して立ててある夕食の残りの川魚を、もういちど火に焙あぶって食べた。そしてまた横になった。敷いた松の小枝が背中を刺したが、それを敷かないと地面の湿気が服に移って眠れない。

最初の夜に、孝作はそのことを吉岡に教わった。

横になって火を見ていると、松葉が背を刺し、炎がチクチクと肌を刺した。そして孝作はいつの間にか眠った。

吉岡は孝作の父より若い、頭には白毛が混っていた。髭に覆われていない吉岡の顔を孝作は見たことがない。痩せて背が高く、その髭にも所どころ白毛があった。

二、三日働いては去ってゆく子供連れの流れ者の夫婦まで含んで、孝作の父の牧場をたくさんの人々が訪れた。それらの人々は、必ず町の方から坂道を登って来たが、吉岡は、旧式のボルト・アクションの単発銃を背負って、いつも突然に森の中から訪れてきた。あるとき、「あの人もやっぱり人恋しくなるのかしら」

と母が言ったのを孝作は覚えている。父は、

「なに、目当ては酒だ」

と言った。

孝作は、そんな具合にふっと森を出てくる吉岡のことを幾度も考えてみたが、そのたびに、ただしんとした不思議な思いがあるだけだった。そして結局、

「へぼくは、おじさんが好きだ」

と思った。

吉岡はいつも、胸のポケットにきれいな鳥の羽根を入れてきて孝作にくれた。母には、季

節ごとの木の実や山菜や茸が手みやげだった。捕ってきた川魚や鳥は、父と吉岡の酒の肴になった。

孝作の家に来ると、吉岡は何日間か毎日酒を飲んでまた森に帰ってゆく。その吉岡を父は「奇人」と呼んだが、母は「いい人」と呼んだ。孝作の兄は、その吉岡に敬語を使った。

森で鳥や獣を追っている吉岡の暮しが、孝作の心を魅了していた。だから、吉岡に森へ連れていってもらうことは、孝作のずっと前からの夢であった。しかし、孝作がそれをせがむたびに、吉岡は自分の胸のあたりに手をあてて、

「坊主、背がこの位にのびたら、森へでも町へでも連れて行ってやるぞ」

と言ってとりあわなかった。孝作は吉岡の姿を見ると、必ず背くらべをする。

今度も吉岡は森から来て何日も孝作の家にいた。少し前から雨ばかり降り続いていた。

「ちょっと雨やどりに来た」

と吉岡は言った。そして毎日、酒を飲んでいた。

吉岡が来て三日たち四日たつうちに、雨降りのまま夏休みに入った夜、吉岡は酔った声で孝作を呼んだ。

「坊主」

「なに？」

吉岡はくしゃくしゃと孝作の頭をなでた。

「森へ行くか？」

「ほんと？」

思わず孝作が叫んだ。

「ほんとだ。ピーピー泣かなきゃ連れて行く」

「うん。ぼく泣かない」

父と母がその孝作の真剣な表情を見て笑っていた。雨が上がり次第に出発するという吉岡の言葉と指示にしたがって、孝作は森に入る準備を進めた。

準備は簡単だった。食べものは一握りの塩と味噌だけである。そのほかに、水筒、ナイフ、^{なた}鉋、テグス、虫ピン、虫眼鏡が孝作の持つものの全てだった。水筒と鉋を除いて、全部ポケットに入った。

靴は、父の乗馬用のブーツをまねて作った膝まである皮の長靴があった。鉋はベルトにつけた。こうしてアノラックを着ると準備は完了した。孝作は緑の山々に降る雨と、父と酒を飲んで、いっこうに立ちあがる気配のない吉岡の姿を交互に見ながら、何度も何度も、それらの全てを点検した。しかし、点検はすぐに終ってしまい、雨は降りやまなかった。

アノラックを脱いだり着たりしている孝作を見て父が言った。

「孝、おじさんを困らせるなよ」

孝作は強く頷いた。

「坊主、本当に泣かずに三晩我慢したら、一人前の男にしてやるぞ」と吉岡が言った。それから父に向って、

「お預りします」

と言った。酔って舌がもつれていた。

孝作は一抹の不安を感じて、三晩、と心の中でつぶやいた。威圧する巨大な闇の怖しさを孝作は知っていた。

孝作は棺で鳴き交す鳥の囀りに目を覚めた。

あたりに吉岡の姿はなく、焚火の中で新しい枝が音をたてて燃えていた。頭を動かして周囲を見ると、顔の上の草が冷たい雫を落とした。首のところに柔らかく触れているのは、吉岡の上衣だった。孝作は起きあがった。

森の中は冷気と静けさに満ちていた。東の空から降りそそぐ新しい光が、木々の葉を透かし、鋭角を描いて大地に届いた。その幾条もの光の筋の中に、機敏に飛び交っている小鳥たちの影が見えた。焚火の煙が青く地を這っていた。

これが、あの黒ぐろと魂に影を落とす夜の森と同じ森だとは信じられなかった。太古の匂いをのせて木々の間を過ぎていった風、吐息を洩らしていた梟たちはどこに消えたのだろうか。孝作は思った。焚火にも黒をおびた輝きはなく、白く色褪せて弱い小さな舌を出しているばかりだった。その孝作の前で、夏の朝の水色の風がゆっくりと朝靄を動かし、朝露に濡れた木の葉が、秋のせせらぎのように輝いた。

「起きたか」